

第5版序

眼科用語に関しては1931年に眼科術語集が出版されているが、1988年に眼科用語集の初版が刊行された。その後、第2版(1991)、第3版(1994、1998年に第2版の増刷)を経て、第4版が1999年に刊行された。したがって、第5版の発刊は過去の発刊間隔からは短くなっている。この理由としては近年のIntelligent Technologyの急激な進歩、変革が挙げられる。パーソナルコンピュータの普及は目覚しく、実務においては、こうした電子機器抜きでは考えられない状況になってきている。このような状況にあって情報交換、伝達の基盤である用語(学術用語)はその学術的内容、すなわち正しい語彙、用語であるのみならず媒体についても現状に則している必要がある。幸い、学術的内容については第4版が清水弘一委員長の下で語源に遡っての検討がなされ、また白内障の呼称にみられるように知識の整理にも有用な用語集として発刊された。

第5版の編集委員会は前述の情報機器、環境の変革を背景に第4版発刊と同時に日本眼科学会・本田孔土理事長(当時)が編集委員会をあらたに発足させた。したがって、編集委員会としては学術的基盤は第4版に準拠するものとし、発刊媒体を書籍に加えて電子媒体とすることを編集方針の主眼として鋭意検討を行うこととした。編集作業においては委員間でメーリングリストを運用し、その上で日本眼科学会内に用語委員会アドレスを設け、用語に関する意見を受けることとした。あわせて、実際の委員会では用語ファイルのコンピュータ画面をプロジェクタで投影し、検討、修正を行うとの方法により紙媒体を全く使用しない方法を採用した。

委員会では発行媒体の変更、追加に伴い、第4版までの発行形態の基本構想、すなわち臨床の場で容易に扱えるように白衣のポケットに納まる大きさ、厚さ(このために紙質も薄くて丈夫なものとの細かい配慮がなされている)であることとは別に、むしろパーソナルコンピュータに組み込んで使用することをもとにして紙媒体の形状の変更を行うこととした。

こうした基本的方針のもとに委員会では、用語の採録等については委員会での検討結果を基本とすることをご了承くださいとともに日本眼科学会に属する専門学会、日本眼科医会、日本耳鼻科学会などの他領域の学会にも資料の提供、協力を依頼し編集作業を行った。多くの学会、個人から快くご協力、ご教示ならびにご示唆を賜ることができ、あらためて紙面を借りて厚く御礼申し上げる次第であ

る。

—「英（外国語）・和」用語について—

第4版序でも述べられているように、「一つ概念には一つの述語が対応する」との原則に従って既採録用語との整合性、新規採録用語間での整合性についての検討を委員会で行った。しかし、一部は委員全員でも結論がでなかったものもあり、問題点のご指摘を受ける可能性があることを予めご了解いただきたい。

第5版では色覚関係の用語の改訂がなされた。また、眼底疾患に関する病態の概念およびその治療法の進歩も受けて用語の追加、改訂がなされた。その上で従来の採録用語に関しては第4版での方針と同様に〔旧〕を付して対照が可能なようにした。同時に、極めて古い用語に関して記載から外すことも検討したが、今回はそのまま〔旧〕を付して残すこととした。また、関連項目については第5版では削除してある。これは電子媒体での検索機能を活用することで多くは補完できること、ならびに関連項目としての採録用語の範囲決定の困難さに起因するものであり、ご了解いただきたい。

こうした編集作業をもとに和語に対してカタカナルビを付した「英・和」用語について2004年11月の日本眼科学会評議員会においてCD版（案）として配布し、その後、関連学会にも配布しご意見を伺うこととした。配布CD版ではカタカナルビの誤字、間違いが多くあり、ご迷惑をおかけする一方で多くのご教示をいただいた。その後、こうした誤字、間違いを修正し、あわせて和英、略語についての検討を行った。このCD版は日本眼科学会会員専用ホームページ (<http://www.nichigan.or.jp>) に電子版として掲載することとした。

—「和・英（外国語）」用語について—

歴史的に我が国の医学用語は漢方医学をもとにした漢語の翻訳、ついで江戸時代中期からはオランダ語の漢語的日本訳語、さらに幕末からは瞬間的に英語に振れる要素はあったが、ドイツ語（プロシア医学）の日本語訳語が主体となった。その後、第2次大戦後は一般社会・科学における英語の優位性から英語の日本語訳語、ならびに従来のドイツ語の日本語訳語を英語に対応させる（むしろこのパターンが最も多いが）との変遷がみられており、和語（邦語）から英語（外国語）への対語は必ずしも容易ではないのが実情である。すなわち、第4版でも一つの英語に二つ以上の和訳語が付されている例が多いことにもあらわれている。第5版では「英・和」での採録用語を「和・英」に収載するとの方針で編集を行った。したがって、第4版の「和英」部分よりも大幅に採録語が増加することとなった。これらの作業において〔旧〕の付されている用語は原則として「和語」として採録しないこととしたが、「異なる和語に対して同一の英語が対語となっている

例」が少なくない一方で、「一つの和語に対して複数の英語」が採録される結果も生じた。これは前述のごとく「一つ概念には一つの述語が対応する」との原則に反することになる。特に後者については問題が多いため、委員会では、英文論文で多く用いられている用語を採録する努力を行ったが充分ではないことを予めご了解いただきたい。この作業においては米国を中心に用語の選別化が行われていることも念頭においた。代表的なものとしては「senile → age-related」, 「blind (ness)」などの読み替え、などが挙げられる。また、「炎症」、「変性」などに関しては病態概念の進歩による用語の改訂が行われている。しかし、これらの変更は実際の臨床の場、更に英文学術誌でも統一されていない例もみられる。また、英国では米国との間に微妙な差があり、用語によっては、「それほどの関心が払われていない」、「変更の必要性を感じていない」、「むしろ米国での用語の乱れ」が指摘されていることなども「和・英」での難しさを痛感した。

「和・英」用語の活用にあたっては上記の問題点に留意し、論文執筆などでの補助にしていきたい。

—「略語」について—

略語については、「学術分野において可能な限り使用しない」との大原則を踏まえた上で採録することとした。略語の編集にあたっては American Medical Association 発行の Style of Manual : a guide for authors and editors, 9th Ed. Williams & Wilkins, Baltimore 1998 を参考にした。すなわち、本書で略語として一般的に容認するとしている用語とそれ以外の用語とは区別することとした。後者の用語の多くは眼科領域のみでの共通の略記法として認識をもつことを目的にしているので当然、論文（さらに細かく言えば、論文表題（可能な限り略語は使用しないことが推奨されている）、要約、本文、表、図の説明の各部分）の初出部で用語全体（expanded form）を記載する必要がある。

用語集は日本眼科学会の領域にとどまらず、教科書、医師国家試験、その他社会の様々な領域にも関係する重要な刊行物である。こうした重要性を踏まえて日本医学会においても用語に関して用語委員会を設置し、関連学会の意見の集約を図っている。当該委員会は横断的な意見の集約、整合性の機能までは果たしていないが、電子媒体での用語集の出版の推進を図っており、今回の第5版はこうした医学会全体の先陣群をなすものである。電子媒体での刊行は用語集が紙媒体以上に活用され、あわせて今後の用語の検討、改訂を容易にするものであると確信している。用語そのものに限らず、使用上での問題点に関して忌憚のないご意見をお寄せいただければ幸いです。

日本眼科学会用語委員会

委員長 澤 充

委員 阿部 春樹

石橋 達朗

市川 一夫

望月 學

松橋 正和

担当事務 西村 千之

(メールアドレス：yougo@po.nichigan.or.jp)